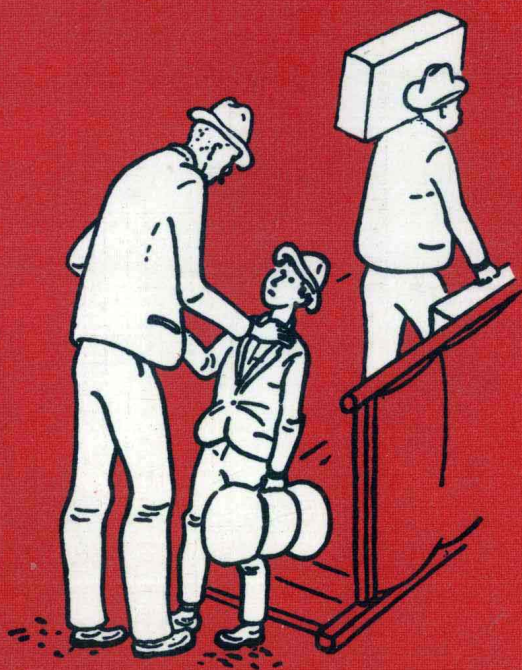


クオレ下

アミーチス作 前田晁訳



岩波少年文庫 1008

973 ク オ レ 下 (全二冊)

— 愛の学校 —

アミーチス作

前田 晁訳

岩波書店 1955

290 p. 18 cm (岩波少年文庫 1008)

小学中級以上

Ed. De Amicis: Cuore, 1886

ク オ レ 下 (全二冊)

岩波少年文庫 1008

1955年9月25日 第1刷発行 ©

1977年5月10日 第24刷発行

¥ 400

訳 者 まえ だ あきら
前 田 晁

東京都千代田区一ツ橋2-5-5

発行者 岩 波 雄 二 郎



発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111 振替東京 6-26240

落丁本・乱丁本はお取替いたします

印刷: 精興社 製本: 田中製本

ク オ レ 下

—愛の学校—

アミーチス作

前 田 晁訳



岩波少年文庫 1008

もくじ

三月の巻 まき

夜学 やがく	九
けんか	二
生徒の親たち	一六
七十八号	一九
少年の死	二三
三月十四日の前日 ぜんじつ	二五
賞状授与式 しょうじょうじゆよしき	二六
争い あらそい	二八
ぼくのねえさん	三〇
ロマーニヤの血 ち (毎月のお話)	三三
死にかけている「左官屋さん」 さかみや	三五
カヴール伯爵 はくしやく	三六

四月の巻 まき

春 六四

ウンベルト王 六六

幼稚園 七五

体操 八二

おとうさんの先生 八七

回復 一〇五

労働者の中の友だち 一〇七

ガルローネのおかあさん 一一〇

ジュゼッペ・マツチニ 一二三

市民勲章（毎月のお話） 一二六

五月の巻

佝僂病の子どもたち 一二五

犠牲 一二九

火 事		一三二
母をたずねて三千里（毎月のお話）		一三八
夏		一九九
詩		二〇二
おしの娘		二〇五

六月の巻

ガリバルディ		二二二
軍 隊		二二三
イタリア		二二六
三十二度		二二八
ぼくのおとうさん		二三二
遠 足		二三五
労働者への賞品授与式		二四一
亡くなった女の先生		二四五
感 謝		二四八

難破船(最後の毎月のお話).....	二五二
--------------------	-----

七月の巻まき

おかあさんの終りのページ.....	二六三
試験.....	二六五
最後の試験.....	二七〇
おわかれ.....	二七四
あとがき.....	二八一

ク
オ
レ
下

— 愛の学校 —

三月の巻まき

夜学やがく

二日、木曜日。

ゆうべ、おとうさんにつれられて、ぼくたちのベレッチ学校の夜学やがくを見にいった。学校にはもうあかりがすっかりついて、夜学へくる労働者ろうどうしやたちがはいりはじめていた。ぼくたちが着いたときに、校長先生やほかの先生がたが、たいへんおこっていた。それは、すこしまえに、窓のガラスに石をなげてこわしたものがあつたからだ。小使いさんがとび出して、通りがかりのひとりの少年の髪かみの毛をひつつかんだ。ところが、そのとき、むこうがわの家に住すんでいるスタルディが、からだをあらわしていった。――

「その子ではありません。ぼくがこの目で見たんです。フランチです、石をなげたのは。フランチはぼくに、『いいついたらひどいぞ！』と、いいました。でも、ぼく、こわくはありません。」すると校長先生は、フランチは、けっきょく退校たいこうさせなければなるまいといった。そういうう

ちにも労働者は二、三人ずつはいつてきた。そして、二百人以上もうはいつていた。ぼくはいままで夜学やがくのようなおもしろいものを見たことがなかった。そこには十二歳じふにさい以上の少年もいれば、仕事から帰りがけに、書物や筆記帳ひつぎちようをもつてきた、ひげのはえたおとなたちもいた。大工だいこくもいれば、黒い顔をした機関手きかんしゆも、手に白い、くいのついた左官屋さかんやも、髪の毛にいっぱい麦粉むぎこのついたパン屋の若いしゅもいた。ワニスや革かわや松やにや油のにおいや、いろいろな商売という商売のにおいがしていた。また砲兵工廠ほうへいこうしやうの工員たちも、兵士のような服ふくをきて、伍長ごちやうに引率いんそつされてはいつてきた。みんながどやどやと腰こしかけに割りこんで、ぼくたちがひるま足をのせるふみ板をとりかけると、すぐに頭をかがめて勉強べんきやうにとりかかった。

開いた筆記帳ひつぎちようを手にとって、先生のところへ説明せつめいをききにいくのもあった。ぼくはあの若いきれいな服をきた、「弁護士べんごしさん」と、よばれている先生が、三、四人の労働者にテーブルをとりまかれて、ペンでなおしてやつてゐるのを見た。びっこの先生はまた、赤と青とで美しく染めわけた筆記帳ひつぎちようを持もつてきてくれた染物屋そめものやといっしょに笑つていた。ぼくの先生も、病氣びやうきがなおつて、あしたからは学校がっこうに出るので、やはりきていた。教室の戸はあけはなしてあった。ぼくは、課業かぎやうがはじまつたときに、いかにみんなが熱心ねつしんであるか、いかにみんなが目めをじつと本の上にすえてゐるかを見て、おどろいた。しかも校長先生のお話によると、大部分だいぶぶんのものは、ちこくしないことことようと思つて、晩飯ばんめしを一口ひとくちたべにさえ家へかえらなかつたので、腹はらをへらしているということ

だ。

しかし年の若いものは、半時間もたつと、そろそろいねむりははじめた。ひとりなどは机の上に頭をふせて、ぐっすり寝こんでしまった。で、先生がペンで耳をつつついておこした。けれど、おとなの人たちは眠ろうとなどしなかった。みんなはつきり目をあけて、大きく口をあいたままで、まばたき一つしないので、授業にききいつていた。こういうひげのはえた人たちがぼくたちの机にいるのを見ると、なんともいえない気もちがした。ぼくたちはまた二階へもいった。ぼくたちの教室の戸口へ走っていつて見ると、ぼくの席には太い口ひげのある、手にほうたいをした人がいた。何かの機械のそばで働いていて、けがをしたのだろう。たいへんゆっくりとではあったが、字を書く練習をしていた。

しかし一ばんおもしろかったのは、あの「左官屋さん」の席に、その同じ机の同じはしのところに、山男のように大きな、おやじさんの左官屋が、きゆうくつそくに丸くちぢこまってすわりながら、あごにこぶしをあてて、息もつかないほどに余念もなく、目を書物の上に向けていたのを見たことだった。しかもこれは、ぐうぜんになつたのではなかった。おやじさんが学校へきた最初の晩に、校長先生にこういつたのだった。

「校長先生、どうぞわっしを『うちのウサギつら』の席においてくだせえ。」
おやじさんは、いつでもむすこのことをそう呼んでいる。



校長先生の背の^せ高い^{つか}疲れた^{すがた}姿が、むこうに消えていくのが見えるだけだった。

けんか

五日、日曜日。

おとうさんは、夜学^{やがく}の終るまでぼくに
見させたので、ぼくたちは町に出たとき、
おおぜいの女の人^だが子どもを抱いて、夜
学から出てくる夫^{あつと}を待っているのを見た。
すると、入り口のところで、とりかえっ
こがはじまった。夫が子どもを抱きとっ
て、かわりに書物^{しよぶつ}や筆記帳^{ひきぎちよう}を待っていた
女の人^だにわたすのだ。そして、つれだっ
て家路^{いえじ}にむかっていった。しばらくのあ
いだ、町は人と声とでいっぱいだった。
が、やがてまったく静か^{しずか}になって、ただ

こんなことがおこるのではないかと思っていた。フランチは、校長先生から退校を命ぜられたので、スタルディにうらみを晴らすとして、学校からの帰りがけに、物かげでスタルディを待ちぶせていた。そうとも知らずにスタルディは、毎日、ドーラ・グロッサ通りにある学校からつれてかえる妹といっしょに、そこを通りかかった。ちょうどそのときシルヴィア姉さんが学校から出てきて、そのできごとをすっかり見とどけて、ひどくびっくりしてかえってきた。それはこうだったそうだ。フランチは、例の蠟引布の帽子をいっぽうの耳の上にかぶさるようにかぶって、スタルディのうしろへつまさき立ちで駆けよると、スタルディをおこらせるために、いきなり妹のおさげをつかんで、ぐいっとはげしく、妹をあおむけにころばしかけたほどに引っぱった。妹はわっと泣きだした。スタルディはぐりとふり向いた。フランチは、スタルディよりも背も高いし力も強いので、こう考えていた。――

「きゃつ、なんともいいやしまい。いったらはりとばしてやる！」

ところが、スタルディは、すこしもちゅうちょしなかった。小さくて、ずんぐりしているのだが、一とびに大きな相手にとびかかると、こぶしをあげて打ちはじめた。けれども、たちまちあべこべに、さんざん、なぐりかえされた。道には女の生徒たちしかいなかったたので、引き分けてやるものが、だれもいなかった。フランチは、スタルディを地べたになげつけた。スタルディはすぐに起きあがって、またもやとびかかっていた。フランチは戸でもたたくようにめっちゃくち



やになぐりつけた。見るまにスタルディの耳は裂かれ、目は傷つけられ、鼻からは血が出てきた。しかしスタルディは屈しなかった。かれはうなった。――

「殺すなら殺せ。ただは殺されないぞー」
そして、フランチは上からけったりなぐったりした。スタルディは下から頭でついたり、かかとでけあげたりした。

ひとりの女が窓からさげんだ。

「小さいほうがえらいわー」

ほかの女たちが口々にいった。

「あの子は妹をかばっているんだよ。」

「しっかりおしよー」

「まけちゃいけないよ。」

そして、フランチをののしった。

「ごろつきやろう、卑怯者。」

しかし、フランチは、ますます狂暴^{きやうぼう}になって、足がらをかけた。スタルディはころがった。フランチはとびかかった。

「こうさんしろー」

「だれがー」

「こうさんしろー」

「だれがー」

と、ぱっとスタルディはね起きると、フランチのからだをひつつかんで、そして、けんめいの力を出して、地べたにたたきつけて、どしんとその胸^{むね}の上に片ひざをついた。

「あっ、あのやろー！ ナイフをもっているー！」と、ひとりの男がさけんで、フランチのナイフを取りあげようと、とんでいった。

しかしスタルディはもう、おこって気持ちがいのようになって、フランチのうでを両手でぐつつかむと、そのこぶしにかみついてナイフを落^おさせていた。フランチの手からは血^ちが出ていた。

そうこうするうちに、おおぜいの人が駆^かけつけてきて、ふたりを分けて引きおこした。フランチはみじめな姿^{すがた}で逃げ^にだした。スタルディは顔じゅう傷^{きず}だらけになって、片ほうの目を黒くして、

——しかし、勝ちほこって、——泣^ないている妹のそばに立っていた。二、三人の女の子が、道にちらばっている書物や筆記帳^{ひつぎちやう}を拾^{ひろ}い集^{あつ}めてやった。